硫黄島レポート

理工学研究科　海洋土木工学専攻　１年　小牧裕幸

今回は、初めて三島村の硫黄島を訪れ、様々なことを学ぶことができた。過去に観測で十島村の口之島と中之島を訪れる機会があった。そのとき感じた印象とは違ったものを今回は感じた。人口でみると硫黄島と口之島、中之島はほとんど変わらないが硫黄島においては活気を感じることができた。フェリーが寄港したときのジャンベの演奏が特に印象的であった。口之島などではそのようなことは無かったので島に対する印象がかなり違ったのだと思う。

今回行った硫黄島は人だけではなく日用品や発電用の燃料もほとんどを船で輸送している。船が運行できなくなると日用品が島に入ってこなくなり、また発電用の燃料も供給できなくなることから、内燃力発電に頼っている島としては日常生活への影響は大きい。発電に関しては、地熱発電の導入の話があったので電力に関しては解決できそうだ。火山島の特色を活かしている。地熱発電は、燃料が不要で半永久的に安定して発電ができ昼夜を問わず発電可能である。また、大容量の発電ができないという欠点があるが、発電した電力を島内で消費すれば問題ない。発電した電力は、ロケット燃料の液化水素を作るのにも利用するというお話があったので島の収入源になると考えられるが、ロケット打ち上げの頻度は多くないので他の使い道を考える必要がある。また、排熱の問題もある。北海道の森地熱発電所においては、野菜生産用の温室を作り野菜を育てている。硫黄島に合った熱利用方法を考えなければならないと思った。

教育面については、子どもの数が少ないので良い環境で教育が行えていないのではないかと思っていた。しかし、他の学年と一緒に授業をやったり、生徒数が少ないことを活かして、一人ひとりがしっかりと考える授業ができていることが分かった。また、「知る仕組み」、「認める仕組み」、「褒める仕組み」、「つなぐ仕組み」、「戻る仕組み」、を育てる教育を行なっている。私自身、人口の少ない離島や過疎地域の学校に通ったことが無かったので、教育において「戻る仕組み」の重要性というものを感じたことがなかった。島には高校がないので、子どもたちは中学校を卒業すると島外に出て行ってしまう。子どもや若い人がいれば島は残っていけると思うので「戻る仕組み」が重要だと思った。また、授業の方法として、外部との交通手段がフェリーしか無い硫黄島では人を呼ぶのは時間がかかってしまうので呼びにくいと思う。三島村はインターネットの光回線が通っていることから与論島のような TV 会議システムを用いた教育が有効だと思う。

この 2 日間で様々なことを学ぶことができた。硫黄島には茶色い海があることは知っていたが、実際に見るのは初めてで驚かされた。アフリカの文化「ジャンベ」を体験することができた。また、離島における人口の問題や教育方法など、実際にその場所に行かないと聞くことのできない生の声を聞くことができた。様々な体験をすることができ、充実した時間を過ごすことができた。先生方、島の関係者の皆様、貴重な体験をさせて頂き本当にありがとうございました。